

2005/08/07 第五回フィロソフィア

プラトン著『饗宴』（久保勉訳、岩波文庫）

1. 背景

- 本篇の原題は『シュンポシオン』symposion であり、英語の symposium の語源となっている。もとのギリシア語では「一緒に（酒を）飲む」という意味だが、ギリシア人は飲みながら議論を交わすことを楽しんだ。
- この本の序説によると、この『饗宴』が執筆されたのは紀元前 384, 5 年頃だという。それはプラトンがアカデメイアを創立して（紀元前 386, 7 年頃）しばらく後のことであった（11 頁）。
- 本篇は二重の間接説話の形式になっているが、主な議論は紀元前 416 年のアガトン邸で展開される。悲劇作家アガトンはこの年、初めて悲劇のコンクールに勝利し、その祝勝会が派手に催された。その次の日の酒宴における、エロスを讃美する演説が本篇の舞台である。

2. 饗宴 〔一名、愛論、倫理篇〕

I. 前置きの会話

- 紀元前 400 年ごろ、アポドロスは友人に、アリストデモスから聴いた、紀元前 416 年に催されたアガトン宅での饗宴の話をした。

II. その話の内容

- ソクラテス、アガトンに招待され、アリストデモスをつれてアガトン邸での晩餐に出かけるが、途中で少し考え事をしてしまい、食事が終わった頃に遅れて到着する。
- 前日の祝勝会で皆しこたま飲んだので、この宵でもまた沢山飲むとなるとしんどいという意見が出て、この宴会では適度に飲むことにし、その代わりに、エロスを讃える演説を御馳走に時を過ごすことにした。

◎ファイドロス

- エロスは最も古い神の一人であり、驚異すべき偉大な神である。（178）
- エロスの発生…カオス（混沌）がまず成り出て、次いでガイヤ（大地）とエロスとが生じた（ヘシオドス『神統記』）。
- エロスは、徳と幸福との獲得に当てる最も権威ある指導者である
- 羞恥、名誉慾：恋する男（愛者＝愛する者）は、恥ずべき行為を愛する少年に見られたときに、最も羞恥心を覚える。少年も恥ずべきことをしているところを愛者に見つけられたとき最も恥ずかしいと感じる。（179）
→ 勇気は、エロスが彼の賜物として愛者達に与えるもの。
- 相手のために死のうとまで決心する者は、ただ愛する者だけである。
アルケステイス（夫のために死ぬ）、アキレウス（愛者パトロクロスのために死ぬ）は、その行為のために神から幸福を与えられた。（180）

◎パウサニヤス

○エロスは唯一ではないので、ファイドロスのように無差別に讃美してはならない。

- ・行動それ自体には美醜の差はないが、その行動がいかになされるかによって、その性格が決まる。愛することも同様であり、讃美に値する種類のエロスは、ただ美しく愛するように鼓舞する者のみである。(180-181)

●いかなるエロスを讃美すべきか？…二種類のアフロディテと二種類のエロス

- ・万人向けのもの（パンデモス）：ゼウスとディオネとの間の娘。
このエロスは少年だけでなく婦人にも向けられ、魂以上に肉体を愛する。
- ・天の娘（ウラニヤ）：母のない、ウラノス神の娘。天上のもの（ウラニオス）。
ただ男性のみにあずかって生まれたため、このエロスに鼓舞された者は強き者と理性に富める者とを愛好し、少年愛に向かう。
またこれらの者は、少年に智慧がつき始めるまではこれを愛することをしない。
(181-182)

●愛に関する慣習（ノモス）

- ・弁舌に拙い地方…少年を説得する労を省くために、ただ愛者の意に従うことを善美とする。
- ・異邦人の支配下にある地域…僭主は、臣民の間に雄志を抱く者が現れたり、強固な友情と団結とが発生したりするのを恐れるので、愛者の意に従うことは恥辱とされる。
(182)
- ・アテナイ…少年が良き者の意に、良き仕方で従うように、愛者を厳正に吟味するような慣習。あまり早く説得されたり、金銭や政治的権力のために説得されたりするのは恥辱。
しかし、人が何らかの智慧、またはその他徳（アレテー）の向上がある人の指導によって促進されるという信念のもとにその人に奉仕しようとするとき、それが例え見当違いだったとしても、徳のために行為を示すことはいかなる場合においても美しい。
…これが天上の女神に属するエロスで、このエロスは、愛する者にも愛される者にも、徳を勧めるために真剣に自分自身を顧慮することを余儀なくする。(183-185)

◎エリュキシマコス

●エロスが二種あるという主張は当を得ているが、エロスは単に美少年に対する愛として人間の魂の内に存在するのみならず、人間の事といわず神々の事といわず、一切の上にその勢力を張っている。…神話ではなく医術の説明からはじめる(186)

- ・エロスは不和なるものに愛と和合をもたらし、協和に至らせる。
医術…体内の不和なるものを互いに親和し相愛するに至らしめる
音楽…高音と低音が協和させられて諧調となり、速と緩とが協和して節奏が生ずる
…諧調と節奏の組成そのものには二種の愛はないが、ひとたび節奏と諧調とを人間の間に適用する場合には、二種の愛の区別が出てくる。そして一切のことにおいて、

両種のエロスに出来る限り注意を払うべきである。(187)

◎アリストファネス

●人間の本性（原形）とその経歴についての神話

- ・かつて人間には、男女の性だけでなく、両性の結合した男女（おめ）という性があった。そして人間はひとつの体に反対方向を向いた顔を二つ持っていた。彼らは神々を攻撃しようとしたため、神々は人間を真っ二つに切断した。(190)

両断されたのち、半身はいずれも他の半身に憧れて、他のことを差し置いて体を再びひとつにしたいという欲望を抱くようになった。このままだと人間は死んでしまうので、神々は人間の隠し所を前へ移した。これにより、男女が出逢った場合は抱擁の際に生産して子孫をもうけることができるようになり、男同士が出逢った場合、慾を鎮めて再び自分の仕事に戻れるようになった。

…このように、人間の愛は、人間の昔ながらの本性を再合せ、二つの者から一つの者を造り、そうして人間の性質に治癒をもたらすことを企てている。(191)

- ・男性の片割れである男は、男女の片割れの男とは異なり、男を追いかける、本質上最も男性的な者である。少年の愛者と愛者の友は、単なる愛慾満足のために結合しているのではない。彼らは愛人と再会し融合して二つが一つになることを念願している。その理由は、我々の原始的本性にある。全き物（かつて一体だった頃の体）に対する憧憬と追求が、エロスである。(192)

◎アガトン

- 上来の演説者は、皆あの神（エロス）を讃美しないで、あの神から授かった福利の故に人間を幸福と称えた。しかし正しい讃美の方法は、それがいかなる性質のものであるのか、またそのもたらす結果はいかなるものであるかを明らかにすることである。(195)

●エロスが最も美しく優れた、福なる神である理由

- ・エロスは神々中の最年少者である（≡ファイドロス）
神々の古い事件はアナanke（必然）のせいであって、エロスのせいではない。エロスが神々の上に君臨してからは、友情と平和とが支配した。
- ・エロスはまた柔軟である。そのため粗硬な心情を持った者は素通りするが、柔らかな心を持った者に逢うとそこに宿る。
- ・エロスはその姿もしなやかで釣り合いよく、物腰も優雅である。

●エロスの徳

- ・公正…エロスはいかなる不正も加えず、また誰からも加えられることもない。
- ・自制…快楽と情欲を支配する。エロス以上に強烈な快楽はないので、エロスは快楽を支配するために自制力に富んでいる必要がある。
- ・勇気…エロスはアレス（戦の神）を取り押さえる。最も勇敢な者を支配する者は、ま

た最も勇敢ある者でなければならない。

- ・智慧…あらゆる善事は美に対する愛から発生した。

そしてエロスは自ら最も美しく優れた者であり、他の者にもまた同じような長所を付与する者と思われる。(196-197)

◎ソクラテス

●レトリック批判

- ・何かを讃美するときにはそれについての真実を語らなければならない。それから次に、それらの真実そのものの中から最も美しいものを選び出してできるだけ秩序よく按排しなければならない。

しかし今までの演説は、実際そうなのかどうかは問題外で、むしろただその対象に考えられる限りの最も大きく、美しい性質をくっつけばいいというようなやり方だった。本当にエロスを讃美しようということではなくて、ただ讃美する者のように見せかけようとしていたのではないか、といったことを皮肉まじりに言う。(198-199)

●アガトンとの問答

◎エロス（愛）とは、第一に何かに対して、次には現に欠乏を感じているものに対して存在するものである。それは、対象を常に所有し続けることを求める。

⇒エロスは美に対する愛であり、しかも人は自ら欠いていて所有しないものを愛求するのだから、エロスは美を欠いていることになる。この問答で、アガトンは先の自分の演説が間違っていたことを認める。(200-201)

●ディオティマから聴いた話

ディオティマからエロスについて聴いた話をする。ソクラテスが自分のオリジナルの意見として語るのではない。

◎美しくないからといって、それが醜いとは限らない。中間がある。

- ・例えば、正しい意見（ドクサ）は、知識に基づくものではないが、真実に一致するので無知でもない。よって、智見（フロネーシス）と無知（アマテイヤ）の中間に位するようなものである。

- ・全ての神は幸福で美しいが、エロスは美しいものを希求するので美しくない。よってエロスは神ではない。しかし、人間と違って滅ぶべき者でもない。

⇒つまりエロスとは、神的な者と滅ぶべき者との中間にある、偉大な神霊（ダイモーン、神と人間を媒介するもの）なのである。(202)

◎エロスの両親とその影響

- ・アフロディテ誕生を祝う神々の宴に来ていたポロス（術策の神）が酔いくたびれて眠ったところに、乞食にやってきたペニヤ（窮乏）がポロスの子を得ようと一策を案じた。そうしてできた子がエロスである。(203)

- ・エロスは、母親の性を受けたため、美しくなく、いつも窮乏と同居している。しかし他方で父親にも似て、美しい者と善い者とを待ち伏せして、勇敢で、決して術策に窮する

ことはない。…決して困窮することもなければ、富裕になることもない。

◎愛智者エロス

- ・智慧ある者（神）はもはや智慧を追求することをしない。他方無知者も、自分が智慧を欠くことを感じないので智慧を求めず、智者になろうと願うこともない。そして愛智者は、この両者の中間にいる。

…エロスは美を欠いているために美を求める。それゆえ必然的にエロスは愛智者であり、智慧と無知との中間に位する。（賢明で多策（富裕）な父と、無知で無策（貧乏）な母との間の子だから）（204）

◎エロスの目的

- ・愛する者が善きものを愛し、それを手に入れた場合、彼は幸福（エウダイモン）になる（幸福は全ての人にとって究極の目的なので、なぜ幸福になりたいのかというような問いは不要）。

…幸福への願望と善きものに対する愛（エロス）は、万人に共通するものである（広義の愛）。しかしなぜ万人が愛しているといわないのかというと、私達はエロスの中からただ一定の種類だけを取り出し、それからこれに総括的な名前をつけて愛と呼び（狭義の愛）、その他は他の名で呼んでいるから。（205）

- ・半身の神話（アリストパネス）批判…エロスの追及するものはただ善きもののみであり、それは必ずしも自己のものではない。
- ・愛の目指すものは、美しいものの中に生殖し、生産することである。それは必ずしも美しいものだとは限らない。

…私達の本性は生産することを欲求するが、生産は神的なものなので、美しいものの中でだけ可能である。よって、生産衝動の漲れる者は美しい者に対し強烈な昂奮を感じ、美しい者を領有できた者はその苦悶を脱することができる。

…生殖を目指すのはなぜかということ、生殖が一種の永劫なるもの、不死なるものだからである。滅ぶべき者は、神のように同一性を維持していくことはできないので、自分と同種の若者をあとに残して行くことにより、不死に与ることができる。また、不朽の名声を得たいという功名心という欲望は、生殖のためにするよりさらに激しく人間を駆り立てる原動力となる。

⇒愛の目的は不死であり、不滅である。そのために、一切の滅ぶべきものにこの熱心と愛とが賦与されている。（206-208）

◎恋愛の仕方

- ・肉体の上に生産慾を持つ者…婦人に向かい、子を拵えることで未来永劫に自分を確保しようとする
- ・心霊に生産慾を持つもの…智見やその他あらゆる種類の徳を産出する。その中で最も美しいのは国と家の統制に関するもの（自制と公正）。そういう徳を持っている者が一たび美しき者と交わるようになれば、彼は久しく身に宿していたものを生産し創造する。そして肉親の子供がいる場合よりはるかに強い結びつきをもち、その共

有する子も一層美しく、一層不死な子となる。(209)

◎愛現象の秘儀と真の徳

- ・ 不死に与かるために、肉体→心霊→認識上の美へと順序を追って美しさを追求しつつ、美しいものをみて、愛の道について指導を受ける必要がある。そうして愛の道の境地に近づいたとき、独立自存しつつ永久に独特無二の姿を保つ美そのものが目の前に現れるであろう。人生に生甲斐があるなら、ここに至ることこそ生甲斐である。(210)
- そして美そのものを理性の眼で観た者は、徳の影像ではなく真の徳を産出することに成功し、それを育て上げたものは神の友となることを許され、不死となる特権が賦与されるのではないか。(211-212)

◎酔っ払ったアルキビヤデス乱入

- ソクラテスを称讃する演説。アルキビヤデスはまだソクラテスに惚れているのではと見えるような、あけすけな話
- ・ ソクラテスの意に従いさえすれば彼の知っていることは何でも聴き得ると考え、アルキビヤデスはソクラテスと二人きりになったが、ソクラテスは手を出さなかった。そのためアルキビヤデスは、まるで愛者のように能動的にアプローチしていったが、ソクラテスは応じなかった。
- ・ ソクラテスは戦場でも驚くべきことを沢山行った。
- ・ ソクラテスの言説は最初は極めて滑稽にみえるだろうが、それはその言説がサテュロスの毛皮にでも比較すべき詞や言い回しで外側から包まれているためで、その内部を見たものは、ただこの言説だけが内に意味を包蔵していること、そしてそれが神々しく、徳の像を多く蔵していることを、そして気高くかつ優良になろうとするものが目指すべき一切の者を包括していることを知るだろう。

最後は大勢の酔っ払いが乱入し、大騒ぎとなった。皆がつぶれたり寝てしまっても、ソクラテスは起きていて、いつものように次の日を過ごしたという。